

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第二部

第六章

Edelstein legacy

峯村 明

リ・コンストラクション

[登場人物](#)

[6・Edelstein legacy](#)

[108.](#)

[109.](#)

[110.](#)

[111.](#)

[112.](#)

[113.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

登場人物

桧山 健	21歳の大学生
セオデリック・ウィリアムス	ウィリアムス法律事務所の現在の所長 健の顧問弁護士
トマス・ウィリアムス	セオデリックの父 リモンの弁護士
リモン・エーデルシュタイン	アデレード・ヒルズのブドウ農家
クラウス・エーデルシュタイン	リモンの父 元・宝石研磨技師
桧山 正太郎	アデレード・ヒルズの農夫
絹子	正太郎夫人
正悟	正太郎・絹子夫妻の息子

6・Edelstein legacy

108.

レル・ヴァリスが師と仰ぐバーネット教授は生徒をより理解しようと努める人だったが、それでもヴァリスの扱いには手を焼いていた。

ヴァリスはすること成す事、常に教授の斜め上をいく生徒だったから。

今回のオペだって——いや、このことはとても口外できない。一国の元首の心臓手術を執刀したのが十六歳の学生だったなんて——

それはオペに参加した者全員が共有する事実であり、驚いたことに——医師団のリストを見た患者の家族が、実力のある者が執刀せよと、事前に口を出してきたのだ。だからバーネット教授ははじめとする医師団は少しばかりためらったけれども結局、ヴァリスに任せたのである。

彼には天賦の才がある、現場の医師たちが全員そう認めた。そしてこの少年の人となりは、年長の、経験豊富な先輩たちに反発心を抱かせることがなかったのだった。

ヴァリスが政情不安定な地域の医療に関心を寄せていることを、バーネット教授は以前から知ってはいたが、それがただの関心ではなく、具体的なものになってくると——

その現場を見たいのだという希望は『ご褒美』や『夏休み延長』の範疇を越えていた。本人はお金がないと嘆くが、今回のオペの報酬が彼の懐に入るわけではないからで、それゆえ、バーネット教授は『ご褒美』という言い方をした。その辺の、社会の仕組みがしぜんに理解できてしまうあたりが、やはり天賦の才なのかもしれない。

*

マックス・ペイリーはレル・ヴァリスとそう長い付き合いではない。ただいっしょに遊び歩いた仲間だけである。それでも『(医者としての)やつには、アクティブな何かが向いている』というペイリーの直観は――

――大当たりだったな。

――ペイリーにしろ、ヴァリスにしろ――焦点を定めた時の熱量と集中力がすごい。

――おまえは、健、どうなんだ

くりかえし、その問いが浮上する。彼らの財布代わり、あるいは金銭的パトロンになっているという感覚がどうしても拭えない。『パトロン』という語には本来、負の要素はないのだけれども。

日本で高校卒業後、無為に過ごした二年間が悔やまれた。高三の進路決定のころ、どうしても日本を離れ難かったからだが、自身の弱さや優柔不断を悔いても始まらない。

――けれど、視点を変えてみろ。あれからもう三年になるが、三年前にアデレードへ帰って来ていたら、あの二人には出会えなかったかもしれないぞ。ならば――財布役も、なにか意味があるのかもしれない。そういうことなら、レルの中東旅行の費用を負担してやろうか――

「君の気持ちには沿ってやりたい。だが、大学としては危険な地域へ学生を遣ることはできないのだよ。どんなトラブルに巻き込まれるか、想像もつかないからね」

バーネット教授はそう説いている。レルが行ってみたいと言っているところはそういう場所なのだ。たとえ費用問題をクリアしたとしても、さまざまな事前調査、調整といったものが必要なものであって、一ヶ月かそこらでは準備にも足りないのだった。

かくしてレルは少々粘った挙句、教授の説得に応じ、自身の思いつき発言を認めた。けれども、一ヶ月の夏休み延長はしっかり獲得。

教授は見るからにほっと胸をなでおろした。「術後経過をみる必要があるので私はしばらくここに
いるが」

「しばらくこのあたりを観光したい」、とレルは応え、教授は「では有意義な夏休みを」とほほ笑んだ。

健のところへは老ウィリアムスからメールが届いていた。曰く、
『もうすぐ夏休みも終わりだ。学校へ行く準備はできているだろうね』

——オレは小学生か

——学校へ行く準備なら今しようとしていたところだ

『どうだろう、この週末に一緒に食事をしようじゃないか』

やなこった！ と一蹴りしたいところだが、できない事情があった。桧山 健名義の銀行口座の九割は、老ウィリアムスが握っているのである。財産管理と称して。健本人が自由にできるのは、ほんのちょっぴりだったのだ。

そんなこんなで、週末までに許される自由な二日間、ローマへ戻り、スペイン広場でヘップバーンならぬレル・ヴァリスとジェラートを楽しんでいるとパウジーニから着信が。そういえば彼にはアドレスを教えてあったんだった。彼らは市内のホテルで合流した。

＊

健は明朝の便でアデレードへ帰ることになっているが、レルはまだ未定だった。なにしろ、あと一ヶ月自由な時間があるときている。

「ヴァリスくんはこの後の予定は、決まってないんだって？」、とパウジーニ。彼は二十代後半くらいだろうか。いつもにこにこしている。営業用スマイルではないらしい。

「私はこれからちょっと旅行するんだ。所用でね。どう？ いっしょに？」

レルは、え？ と目を見開いた。

「そうだ、忘れるところだった、レル、おまへの帰りの飛行機代——」

健がいいかけると、パウジーニは「Non」と手をあげた。

「Non necessario. Dr.ヴァリスの帰国まで私が責任を持ちます。『患者のご家族』のご意向です」

ドクター？ アシスタントの学生に対してそこまでするのかと思いつつ、「あなたは、あの人の秘書かなにかですか？」と健が尋ねると、パウジーニはにっこり笑ってただうなずいた。

レル・ヴァリスはパウジーニに同行することになった。

「ホントに楽しかったよ、ケン。きみのおかげでぼくの世界がいっぺんに広がったみたいだ」、とレルは言った。レルも健も、パウジーニの旅行先がアフガニスタンだとは知る由もない。

「きみから借りてる飛行機代、たくさんあるよね、落ち着いたらきっと返すから」

マックス・ペイリーはどうかかわからないが、レルの場合、踏み倒すようなことはしない、に違いなかった。

110.

ローマからはカタールを経てアデレードへ。ハマド国際空港で待ち時間に空港内を歩き、アラビアン・ランプを見つけた。こするとランプの妖精が現れるというあれだ。エキゾチックな色合いと形が気に入ってひとつ買い求める。旅の記念に。

飛行機がオーストラリアへ向けて離陸すると、さすがにほっと気持ちが緩んだ。

太平洋上を飛び、大西洋上を飛び、地中海上を飛び、今はインド洋の上。思えば東へ向かって地球を一周してきたわけだ。その間、赤道を二度越えている。男三人でわさわさと出かけ、ひとりは一サンプアウロで、ひとりは一ローマで別れ、健はひとりで帰ってきた。エキサイティングだった夏も終わりに近い。

「しばらく顔を見なかったが、どうだった、夏休みは」

老人と差し向かいで食事などあまり気が進まないが、財布を握られているからにはそんなことは言っていられないし、今宵の老ウィリアムスは珍しく穏やかな顔をしていたので、健は近況を打ち明けてもいいかなという気になった。アデレード周辺でのんびり遊ぶはずだったのが海外へも足をのばし、地球を一周したことを。

老ウィリアムスは相槌をうちながら耳を傾けていたが、旅の後半の段になってワイングラスをもつ手が止まった。見れば顔つきも変わっている。

「ケン——その、ポルタアウレアで、誰かに会わなかったか？」

「？ オレは友人についていっただけで、誰に会ったのかはわからない。名乗る機会はなかったし、相手が誰だか、知る機会もなかったよ。それがなにか？」

老人はそろそろとグラスをテーブルに置いた。そして、「そうか」、とつぶやいた。

「なあ。ケン」

「はい」

「老人のお節介だと思って聴いてほしいのだが……きみ、恋人は？」

「……は？」

「身を固める予定は？」

「身を固めるっ、て……けっこん？」

「うむ」

「……………」

老人はちょっと笑った。「心当たりがありそうだな。まあ、きみなら、何人か候補がいてもおかしくない」

「え、何人もいない！　ひとりしか……」

近況報告からいきなり話題を変えられ、健はうかうかと口をすべらせた。

健をあたふたさせておいて、老獺な老人はワインの香りを楽しみ、「私の父も弁護士だった」、と語り始めた。

111.

「父トマスは、まだ駆け出しだったころ、エーデルシュタインという男に関わった。リモン・エーデルシュタイン。アデレード・ヒルズのブドウ農家だった。

リモンには娘が生まれたばかりで、奥さんは産後の健康状態が思わしくなく、床についていることが多かった。赤ん坊の世話は近所のキヌコという女性がしていた。リモンは妻子の先行きとエーデルシュタイン家の財産を心配して弁護士を雇ったのだ。

アデレード・ヒルズはブドウ栽培を見超して開拓されたところだったが、父がリモンと知り合ったころには、ピーク時には二百件を超えていたブドウ農家のほとんどが、破産していた。

リモンのブドウ園は彼の父クラウスが手に入れたもので、クラウスは息子が十六の年に亡くなっていた。クラウスはアデレード・ヒルズのもっと北の方に入植し、病気になり、気候の穏やかな南の土地を手に入れて移動してきたのだった。まだ十代だったリモンは父のブドウ園を処分することなど考えられず、周囲が牧畜へと転業していくなか、けんめいにブドウに携わったが、子どもが生まれたことで、さすがに何とかしなければならないと考えた。

すでに多くのブドウ農家が経営に失敗していた土地、リモンの悩みもそういうこと……転業か現状維持か……だろうと、私の父は思ったそうだ。

ところが、話を聞いてびっくりした。リモンはたいへんな資産家だった。聞けば、彼の父、クラウス氏の遺産なのだという」

老ウィリアムスはそこまで話して、相手の様子を観察した。相手は目を見開いて耳を傾けていた。食後のコーヒーカップがソーサーから浮いたままだ。

健にしてみれば——エーデルシュタインは父のミドルネームで、つまり祖父母の代にあたる。彼自身に無関係なわけがなかった。

「話は長くなる。うちへ来ないかね。そこで落ち着いて話そう」

＊

エーデルシュタイン家のオーストラリアでの歴史は、クラウス氏から始まる。1900年代初頭、クラウスはアデレード北部の乾燥した土地へ入植した。オーストラリアは鉱物資源が豊富で、その頃、すでにヨーロッパではオーストラリア産の質のいいオパールが出回っていた。

宝石研磨技師だったクラウスは新天地へ仕事を求めたのである。そこには仕事はいくらでもあった。オパールはもちろん、良質の赤鉄鋼からとれるブラックダイヤモンドも手に入った。磨き上げた宝石を富裕層の多いブリスベンへ送り、相当な財を成した。ドイツから同行してきた妻との間に息子のリモンが生まれ、彼の人生は順調だった。

そしてある時、仲間の探鉱技師と鉱床に潜った彼らはふしぎなモノを見つけた。それをアデレード市の学者に見せると……

「何だったと思う？」

健は正直に首を横に振る。見当もつかない。

「ラジウムだよ」

「ラジウム——？」

「ウランが崩壊する過程でラジウムへと変わるのだ。自然界にはごくわずかしかが存在しない。精製はむずかしく、非常に高くつく。

時あたかも、フランスではマリー・キュリー¹が放射性物質について研究していた。南オーストラリア産のラジウムはヨーロッパへ運ばれ、キュリーの研究に使われた。クラウスはこの事業に関わって、ここでも財を成したのだ。が——彼は早々に手を引いた。体に不調を感じたからだ。北部の乾燥した気候に耐えられなくなり、アデレード・ヒルズへ引っ越した。

彼の病は悪化し、わずか四十六歳で世を去り、まだ子どものようなリモンがブドウ園を継いだ。リモンは懸命に働いてブドウ園を広げた。私の父がリモンの相談を受けたのはその頃のことだ。クラウスが亡くなってから二十年近くが経っていた。

私はよく父に連れられてアデレード・ヒルズを訪れた。そこには小さな学校があって、二十人ほどの子供が通っていたかな。

時々、東洋人の少年が子供たちに算数を教えていた。みんなは『セイゴせんせい』と呼んでいた。私もセイゴせんせいの授業に潜り込み、足し算と引き算を習ったのだよ」

112.

セイゴせんせいの母親はキヌコ、そう、リモンの娘の世話をしていたキヌコだ。キヌコの夫はショウタロウという名だった。三人とも小柄で、黒髪と黒い目をしていて、子どもの私にも外国人の一家だとわかった。キヌコは料理がうまく、よくお菓子をもらった。ショウタロウとセイゴはとても賢そうな目をしていて、とても農夫には見えなかった。

父は考え深そうに、何かわけがあるのだろう、と言った。子どもにはよくわからなかったが、当時は東洋系の外国人の入国を拒む法律があったのだな。

セイゴの一家は、みな慎み深く、謙虚で、働き者だった。ある日のショウタロウは小さな家と、そこそこの畑と家畜を飼っていた。リモンの赤ん坊は彼らが飼っているヤギの乳をもらっていたのだ。しかし、ショウタロウはいかにも不器用者で、野菜の世話も家畜の世話も慣れていなかった。にもかかわらず、けんめいに働いていた。

父は、ある時、セイゴせんせいが学校の空き時間に黒板で微積分を解いているのを見たそう

¹ 放射線の研究で、1903年ノーベル物理学賞、1911年ノーベル化学賞を受賞

なぜそんな勉強をしているのかと訊くと、せんせいは、「知識と、経験と、技術を組み合わせれば、大抵のことは解決すると、父が教えてくれた。だから勉強しているのです」と答えた。セイゴせんせいの先生はショウタロウだったのだ。

ショウタロウは、政府に雇われている地質学者の助手としてブリスベンから来たのだった。本国では商人だったそうだが、数学の知識は地質学でもおおいに役に立ったという。二十年に及ぶ実績と本人の希望からアデレードへの移住が叶ったのだ。ただものではなかったのだな。

クラウス・エーデルシュタインの遺産の処遇について相談されていた私の父は、自分が経済的な知識に疎いことに気がついた。しかしこれから勉強していたのでは時間がかかってしまう。そこで父はショウタロウにもちかけた。「助言をしてくれないか」とね。ショウタロウにはそれだけの能力があると父は踏んだのだった。

しかし、「あなたのために助言をするのはやぶさかではないが、近隣住民であつたり、顔を見知っている人の財産についてとなると簡単には引き受けられない」、ショウタロウは能力もあれば常識も具えた人間だった。

もしも、きみの友人がきみの財布の中身を隅々まで知っているとわかったら、今まで通りの友人でいられるだろうか。ショウタロウはそれを恐れたのだ。

彼が商売人として力を発揮していたら、それなりに成功していただろうと父は言った。

後になって思ったことは、ブリスベン時代からショウタロウは目立つことをすまいとしていたようだった。東洋人というだけで目立つからな。ただ真摯に、日々を生きることだけに専念しようとしているようだった。さもないと東洋人というだけでコミュニティで浮いてしまうことは確実だった。この国がそういう政策をとっていたこともあるが、元来、人の目というものは寛容にはできていないものらしい。こんな新天地を開拓するにあたって、ショウタロウは神経をすり減らしていた。おそらく……妻と子のために。おそらく、妻と子のために、自分の能力を隠してきた。もし彼が、思う存分商才を発揮していたら、彼の代で終わっていたのではなかろうか。セイゴせんせいは生まれていなかったかもしれん。

だがショウタロウは頭をはたらかせた。クラウスの遺産はもっと大きな利益を生むはずだと彼は考えた。

口では、簡単に助言できない、といいながら、ショウタロウはひそかに案を巡らせた。遺産の何割かは、公共事業に寄付するのだ。公共事業ならばいずれは自分に恩恵が返ってくるし、匿名で行えばエーデルシュタイン家から出たとはわからない。ところが後になって……結局、ショウタロウはいろいろ条件をつけたうえでトマス・ウィリアムスのアドバイザーとなることを引き受けた……寄付の案は半分の規模になった。

どうということかって？ ロイヤルアデレード病院に話を持ち込んだところ、その名もエーデルシュタイン基金なるものが発覚した。

クラウスは自分の病がラジウムによるものだ気づき、将来も同じ症状に冒される者が現れることを予想して、ラジウムから得た利益のほとんどを、とうの昔に病院に寄付していたのだ。

おのれに与えられたものは他者のために使う。それがクラウスの考えであり、エーデルシュタインの家風だった。

なんというお人よしか、世間知らずか。そう嗤う者もいるだろう。

だが、ショウタロウの考えはクラウスと同じだったのだ。会ったこともなければ何の接点もないふたりの価値観が同じだったのだ。

ショウタロウの考えた案はすべていい方向に展開していった。しかし人はこう考えるかもしれない。「彼はいずれ自分のものにするために、自分のいいように、あれこれ策を練ったのではないのか？」と。

いや。と私は言おう。それは違う。

ショウタロウはクラウスの考えを形にただけなのだ。ショウタロウもクラウスも無私で無欲のひとだった。しかし、もしかしたら最初からそうだったわけではないかもしれない。順調だったクラウスの人生に重い病が影を落としたように、ショウタロウにも転機があったかもしれない。

リモンは貧しい農夫ショウタロウを自分の父のように慕っていた。じっさい、クラウドがショウタロウの姿をとってそこにいたのと同じようなものだったのだから。

だから……コミュニティの人々は彼らを愛した。だから、リモンが娘の結婚相手にショウタロウの息子を願った時も、みなが喜んだのだ。

やがて、移民法が改正され、人種差別禁止法が制定され、法律によって一切の人種差別が禁止される、その前に、コミュニティは手を取り合っていた。きみのおじいさんとおばあさんはみなに大いに祝福されて結婚式をあげたのだ。

こうして……オーストラリアの主要都市には仕事や休養に訪れる人のためのホテルがたち、匿名の寄付によってアデレード・ヒルズは再開発がおこなわれた。クラウドの遺産はほとんどが不動産に換えられ、いまのところ赤字になっているところはひとつもない。従業員たちの生活を支え、利益を生み続けている。

エーデルシュタインの遺産はコウイチの第一子、すなわちきみが継ぐべしと、きみがこの世に生まれた時に法的に有効な文書にされた。私がそう勧める前に、コウイチがな。だがその本人があんなに早く亡くなってしまうとは思わなんだ。

あの年……セイゴが亡くなり、すっかり気落ちしたヨハナが後を追うように亡くなった。それから半年と経たないうちに、今度はコウイチ夫婦が三歳の息子を遺して逝ってしまった。

まあ、縁起でもないことをいわせてもらうが、桧山家の人間は割合、短命といえるかもしれぬ。そして生まれるこどもはかろうじてひとり。そのかわり優秀ではある。

ショウタロウの人生も、セイゴの人生も、彼ら自身のものだ。きみには関係ないと思うかもしれない。いや、むしろ、それでいいと私は思う。遺産をどう使おうが、きみの人生だ。きみが判断すればいい。

きみが成人して戻って来た以上、桧山家の財産管理者としての私の仕事は終わった。

ただ、な、ケン、候補者がいるのなら身を固めてほしい。父の代から足かけ八十年、桧山家四代の当主と関わってきた私としては五代目の顔がみたいと思うのだよ。

老ウィリアムスは声を詰まらせ、ハンカチを取り出した。
そして思う。ショウタロウの本当の経歴は、まだ明かせない、と。

やがて、ケンが自らそこへたどり着く時がくるだろう。

6・「Edelstein legacy」

7・「Long Goodbye and...」へ続く

あとがき

この章は、大資産家らしい桧山くんの財産の背景を整理しておこうと思ったのでして、彼の個人的な話です。

ところで、オーストラリアはウラン産出国としては世界第五位で、埋蔵量としては世界第一位。(2021年の資料)

そのおよそ半分が南オーストラリアの内陸に集中しています。1900年代初頭に、どうも個人に発見されたらしい。ウランを含む鉱物は当初、デイビダイトとかカルノタイトとか呼ばれ、研究と医療に使われました。

最初に発見されたところはとうに閉鉱、廃墟になっているとかで、地図にも載っていません。

1900年代初頭といえば、アデレード・ヒルズのブドウ農家が破産していったころでして、ウランとブドウ栽培の間にはなんの関係もありますが、時期的に関係があった人がひとりくらいいるかもしれない。ということでクラウス氏の話となったわけです。エーデルシュタイン家の財産がどうやって作られたのか、ずっと頭を悩ませておりましたが、こんなところに落ち着きました。やれやれ。

もうひとつ頭を悩ませている財源があつてですね…しばらく先のことなので、せいぜい悩むことにいたします。

2025年3月21日 記

奥付

リ・コンストラクション

第六章 Edelstein legacy

2025年 3月25日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[写真AC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社